

苦手な子ができるように音読の指導

NPO 法人 えひめ教育技術研究所 理事長 信藤明秀

音読は、国語授業の基礎に位置しています。

すらすら読むことができないければ、内容の理解はもとより、その先にある解釈、批評といったことまでたどり着くことは難しいです。

(文字を目で追って音声化するのが苦手な子への指導は、また別の機会にお伝えします。)

その音読力(=ここでは、教科書の文字を目で追って音声化していくことと定義します。)を向上させるためには、幾つかポイントがあります。

1 音読を好きにさせる

これが最重要事項です。

子どもたちの能力を最大限に引き出そうとするなら、このキーワードは外せません。

「好き」にさせることができれば、自分から取り組もうとしますから、伸びる速度も速くなります。

「やらされる音読」なのか、「自分から取り組む音読」なのかでまったくその後の成長が変わります。

2 授業中に音読させる

音読を「好き」にさせるには、「楽しい」音読を演出することです。

音読そのものが楽しかったり、音読することで成功体験を味わったり誰かにほめられたりする。

そういった音読を演出することです。

そのためには、授業中に音読をさせる必要があります。

教師が音読をマネジメントし、「楽しい」音読にするのです。

ここに、教師の腕が大きくかかわってきます。

音読指導の技能についてはライブで学ぶこととして、音読力を向上させる原則や授業中の音読のさせ方について、たくさんのバリエーションを知っておく必要があります。

3 音読力を向上させる2つの原則

- ① 回数確保の原則
- ② 緊張場面設定の原則

これは、椿原正和氏(教授法創造研究所代表)が、向山洋一氏(TOSS 代表)が述べた

こととして、「基礎学力を確保する授業の激変ワザ」(椿原正和著 明治図書)の中で紹介しています。

4 回数確保の原則

①について。

授業中に練習回数を確保するには、様々なバリエーションが必要です。

ア 追い読み

例えば、先生の読みについて読ませる方法(追い読み)があります。

1文を先生が読み、その後すぐ子どもたちにその文を読ませます。

これを繰り返していくのです。

文字を目で追うことが苦手な子どもでも読み間違いを減らすことができます。

これは、発達障害のある子どもたちにとって特に重要なエラーレスラーニング(無誤学習)の原則にも沿っています。

1文ずつの追い読みを、一つの長い作品を通してやるとだれてしまうので、1ページ終わったら一度立って自分で読ませるなどの工夫も必要です。

イ 交代読み

1文ずつを、先生と子どもたちが交代で読ませる方法もあります。(1文交代読み)

先生(先)と子どもたち(後)で読んだら、入れ替えて、子どもたちが先、先生が後で読ませます。

これを応用すれば、男女交代読み、教室を左右に分けての交代読みなども考えられます。

子どもたちだけの交代読みだとテンポが遅くなり、だれてしまいがちなので、初期は先生との交代読みを使うとうまくいきます。

ウ たけのこ読み

読みたい子が読みたいところで立って読む方法(たけのこ読み)もあります。

同じ文を複数の児童が立って読むわけです。

練習していくうちに、まるで一人の人が読んでいるようにスムーズに、いろいろな子が立って読めるようになります。

低学年でも十分に組み合わせることができます。

立ったり座ったりするので、多動傾向のある子どもたちにも大人気の読み方です。

エ 指名なし音読

読みたい子が立って読む



のはたけのご読みと同じですが、指名なし音読では立ち上がって読むのは一人です。

同時に立った場合はどちらかが譲り、座ります。

机の向き(体の向き)を、お互いがお互いを見ることのできる向きに変えてやるなど、場の工夫も必要です。

なれるとスムーズにできるようになります。

高学年の子たちにも大人気の読み方です。



5 緊張場面設定の原則

②について。

緊張場面とは、誰かの前で読ませる場面です。

授業でいえば、先生の前、全員の前ということです。

位置関係ではなく、状況として考えてください。

例えば、1文ずつ、ある列の端の子から順に読ませていきます。

それを教師が「よし」など、短い言葉で評価していきます。

評価の観点は、「姿勢」「声のはり」「正しく」など、いろいろと考えられます。

テンポが崩れないように、短く笑顔で評価していきます。

合格した子は座ります、合格しなかった子は立っています。

次々とやっていき、最後の子まで行ったら最初に戻ってきます。

そして、また評価していくわけです。

ここで大切なのは、必ず全員を合格させることです。

「できない」状態のまま終わらせるのはよくありません。

「できた」状態で終わることが、次につながります。

6 教師の腕を磨く

以上のようなことを、授業の中で「楽しく」演出することです。

これができるかどうかは、教師の腕次第です。

テニスでもサッカーでも、知っていることと実際に自分ができるとは天と地ほどの違いがあります。

この「腕を磨く」というのは、ライブで見て学び、その後実際に自分でやってみて、それを上手な先生に指導してもらうことで可能になります。

教師の腕が上がれば、音読がうまくできなくて困っている子に力を付けることができます。

一人残らずすべての子たちに力を付けることができます。

私は、こうしたことを全て向山洋一氏の実践から学んできました。